

RI第2780地区 地区大会第1日目会長、幹事会と平行して、職業奉仕にはRI第2680地区パストガバナー深川純一氏、社会奉仕には同じくRI第2680地区パストガバナー田中毅氏をそれぞれ講師にお迎えして、地区職業奉仕セミナー並びに地区社会奉仕セミナーが開催されました。

地区内各クラブの職業奉仕、社会奉仕委員長に大変好評をいただきました。その内容を今月号に速報いたします。

職業奉仕セミナー

『その基本原理について』



国際ロータリー第2680地区

パストガバナー 深川 純一

(伊丹RC)

今日は、『職業奉仕の基本原理』というテーマを頂いておりますが、職業奉仕の話と申しますものは、色々な視点から分析して行かなければなりませんので、時間が長くかかります。したがって、簡にして要を得た話と言うのは仲々できないのであります。

そこで、今日は、職業奉仕の根本原理を中心として、それに若干、実践の原理も加味してお話申し上げたいと思います。

ところで、最近、職業人の倫理の退廃振りは、洋の東西を問わず、誠に目に余るものがあります。日本では、食品関連企業の偽装事件、ごく最近では牛肉偽装工作事件がありましたし、アメリカでも優良企業と言われた通信大手ワールドコムやエネルギー大手エンロンの粉飾会計等々があり、職業倫理の退廃による市民社会の被害は莫大なものがあります。このような状態では、職業社会の繁栄は有り得ないと言わざるを得ません。

今、わが国の経済は、未曾有の不況に遭遇しています。生産は過剰であり、外国の労働賃金はわが国

に比べて非常に安いのであります。どの様にしてこの自由競争に勝ち抜くのか。どの様にしてこの不況を乗り切っていくのか。その唯一つの道は、職業奉仕に徹することであります。

そこで、先ず、職業奉仕を理解するために、どうしても心に留めておいていただきたいことは、ロータリー運動と申しますものは、倫理運動であるということです。即ち、ロータリークラブは、寄付団体でも慈善団体でもボランティア団体でもありません。ロータリアンに奉仕の心を受け、倫理を提唱していく団体、即ちロータリアンの心の開発を第一義とする団体であります。したがって、例えば、街角にタバコの吸い殻が落ちていたとします。ロータリアンとしては、町を美しくするためにそれを避けて通ることはできません。必ずその吸い殻を拾うでしょう。しかし、ロータリーは、そこにロータリーの本願はないよ、と言います。タバコの吸い殻を拾うことは避けて通ることができないにも拘らず、そ

れを拾うことにロータリーの本願はない、と言うと、一体どこにロータリーの本願があるのか。

ロータリーの本願は、タバコの吸い殻を捨てない人を育てるところにあると言うのであります。人を育てること、道徳を守る人間を作ること、その事によって世のため人のために動いて行こうとロータリーは言うのであります。見方を変えれば、それがまさにロータリーが倫理運動だと言うことを意味するのであります。

この点をとらえて、ある学者は、『ロータリーとは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である』と断言しているのであります。この倫理運動であるという視点を見失いますと、ロータリーの職業奉仕が判らなくなり、ひいてはロータリー自体が判らなくなるのであります。

では、ロータリーが倫理運動であるということが、一体どこに書いてあるのかと申しますと、標準ロータリークラブ定款第4条の『ロータリーの綱領』をみますと、ロータリーがまさに倫理運動である、ということが一目瞭然に判るだろうと思うのであります。

ロータリーは、倫理運動であるが故に、古来、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーと言うものは、20世紀初頭以来、先輩達が素晴らしい知恵を残してくれているのであり、まさにこれは、先輩達の尊い知恵の結晶なのであります。したがって、ロータリークラブに入会して、ただ漫然とロータリーライフを過ごすということは、先輩に対して甚だ失礼なことになると思うのであります。やはり、縁あってロータリーに入った以上は、ロータリーを高めるために理想に燃えて色々な知恵を結集してくれた20世紀初頭の先輩たちに敬意を表して、その知恵に学ばなければならないと思うのであります。

何はともあれ、今ロータリーは、巨大な組織になりました。しかし、このロータリーも創立以来100年の歴史を溯って行きますと、そもそもの発端は、ポール・ハリスという青年弁護士の頭脳に宿った一滴の発想、即ち一業一会員制の発想でありました。

これが組織の原点であります。

そして、この一業一会員制という一滴の発想のもとに、人々が集まり、やがてそこに様々な思想や原理が生まれました。

このようにして、ロータリーの思想の世界というものは、決して一枚岩ではありません。ポール・ハリス一人がロータリーを作ったわけではありません。彼は種を蒔きました。その種が芽生えて沢山の人が集まり、そしてまた、それぞれの人達がロータリーをこよなく愛するが故に色々な思想を提唱したのであります。

このように、ロータリーの思想の世界は、色々な思想が集まっているのであります。1959-60年度の国際ロータリーの会長ハロルド・トーマスが『ロータリー・モザイク』という本を書きました。モザイクというのは、ガラスの破片であります。赤、青、黄、緑というような美しいガラスの破片が集まってモザイクが出来上がっているように、『ロータリー・モザイク』というのは、沢山の思想が恰も美しいモザイク模様のように素晴らしい思想の世界を形作っているとハロルドT・トーマスは見たわけでありました。

そして、それらの様々な思想の下に、様々な奉仕の実践が行われ、それらの奉仕が、社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕という具合に類型化された中で、これこそロータリーだということを象徴的に表わしているのが、実は職業奉仕なのであります。

この点をとらえて、誰言うとなく、感覚的に唱えられ出したのが『ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり』という言葉でありました。私達は、今から30年位前までは、耳にタコが出来るほどこの言葉を聞かされたものであります。しかし、最近では殆どこの言葉を聞きません。これもロータリーの衰退を物語るものかとも思うのであります。

ただ、『ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり』という言葉から一つの誤解が生まれました。即ち、ロータリアンでなければ職業奉仕はできない、とか、ロータリアン以外の人には職業奉仕をしていない、という思い上がりがロータリアンの中にあつたことも事実であり、また、そのような

誤解を生んだ言葉でもありました。

しかし、昨今、ロータリアンの中で、本当に職業奉仕を実践している人が、一体どれ程いるのか、と考えた場合、答えは甚だネガティブであろうと思うのであります。

これとは逆に、ロータリアン以外で職業奉仕の原理を実践している人は沢山おられます。古くは二宮尊徳翁もその一人でありました。私達ロータリアンは、謙虚に反省する必要があると思うのであります。

ただ、ロータリアン以外の人達は、その原理の実践を職業奉仕とは呼ばなかっただけのことであります。それは、ロータリーの企業管理論とでもいべき原理でありました。

実は、ロータリーも、1927年になって初めて、その原理の実践を職業奉仕と名付けたに過ぎないのであります。

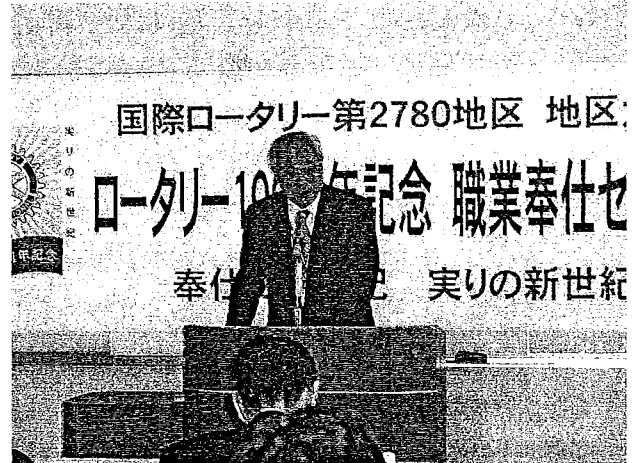
では、職業奉仕と名付けられるまでのその原理は何か。それは「名無しの権兵衛」、いわば夏目漱石の『我輩は猫である。名前は未だない』猫は既に実在しているが 名前が未だ無いという状態、即ち、ロータリーの企業管理論とでもいべき職業奉仕の原理は既に実在していましたが、1927年まではそれを職業奉仕とは呼ばなかっただけのことであります。

要するに、職業奉仕の原理そのものと、ロータリーの職業奉仕の原理とは区別して考えなければならないのであります。

但し、ロータリアン以外の人々の職業奉仕の原理の実践と、ロータリーの職業奉仕の実践とは、一点異なるところがあります。

それは、ロータリーの職業奉仕は、例会における知恵の交換を基にした血みどろの実践の裏打ちがあり、これがロータリーの職業奉仕の独自性を示すものなのであります。ロータリアン以外の人々の職業奉仕の原理の実践には、例会出席による発想の交換という実践の裏打ちがないのであります。ロータリアンの職業奉仕は、例会出席が大前提なのであります。

したがって、『職業奉仕が忙しいから例会には出席できません』と言う言葉をよく耳にしますが、こ



れは、職業奉仕の何たるかを全く理解していないことを物語るものであり、或いは冗談で言っている面もあるかも知れませんが、本末転倒の議論だと言わなければならないのであります。職業奉仕を実践するためには、先ず毎週の例会に出席しなければならないのであります。

また、最近では、一般に、職業奉仕の概念自体がよく理解されていないように思われるのであります。例えば、「一生懸命に自分の仕事をするのが職業奉仕である」という考え方があります。確かに、職業奉仕を実践するには、自分の仕事を一生懸命しなければなりません。しかし、その逆もまた真なのか？と言うとそうではないと思います。

何故ならば、一生懸命に自分の仕事をするとは、ロータリアン以外の人達もしています。極端なことをいえば、暴力団でも一生懸命に自分の仕事をしています。しかし、これを職業奉仕と言う事はできません。やはり、職業奉仕とは何か、ということをお大悟徹底的に理解しておかなければならないと思えます。

さて、ここでひと先ず、職業奉仕の論点を整理しておきます。

第一に、原理論として、ロータリーの世界をひとまず捨象して考えて、職業奉仕そのものの考え方は、一体如何なる原理に基づくのかという問題があります。

第二に、そのような原理が、ロータリーの世界においてどの様に把握されているのか、という問題があります。(総論的課題)

第三に、実践論の課題として、自分の職業を営む

に際し、職業奉仕の原理を如何にして実践していくのか、という問題があります。(各論的課題)

ところで、職業奉仕という言葉は、ロータリーの専門用語であります。一般世間の人達は、こういう言葉は使っていません。辞書を引いても職業奉仕という言葉はありません。ナポレオンは、『余の辞書に不可能の文字はない』と言いましたが、職業奉仕という文字も彼の辞書にはなかった筈であります。

考えてみれば、これは奇妙な言葉であります。何故ならば、職業というものは、私達が生きて行くための所得を得るための手段、即ち、平たく言えば金儲けの手段であって、これは自分のためのものあります。

一方、奉仕というものは、世のため人のためのもの、即ち、自分以外の人のためのものであり、このようにエネルギーの方向が全く正反対の二つの言葉を一つに合体させて職業奉仕と言っているのありますから、判りにくいのも無理はないのかも知れません。

一体、自分のためのものである職業が、人のためのものである奉仕のテーマになり得るのでありましょうか？職業を営むこと、即ち、平たく言えば金を儲けることが、何故、世のため人のための奉仕となるのか？職業奉仕とは、職業を営むこと即ち、所得を得ることをもって奉仕と考えるのでありますから、職業を奉仕と考えるためには、一体いかなる考え方が必要なのか？この一点が判らないと、職業奉仕は、永久に判らないことになるのであります。これを論証していくのが、まさにこのセミナーの課題であろうかと思うのであります。

まず、世のため人のための『奉仕』についての最も素朴な考え方から検討してみますと、職業は、私達が所得を獲得するための手段、平たく言えば金儲けの手段であります。それは、あくまでも自分のためのものであって、そこには、世のため人のためという他人のための考え方は一切入る余地はありません。したがって、職業は奉仕になりません。職業と奉仕は、それぞれ別の世界に存在すると考えること

になります。この考え方からすれば、職業を営むことが同時に奉仕になるとは考えないのでありますから、世のため人のために『奉仕』をしようとするれば、職業以外の方法によらざるを得ません。

例えば、職業によって得た所得の一部を恵まれな人達に供給するとか、自分の労力や時間の一部を割いてボランティア活動をするとかして、いわば弱者保護をもって奉仕と考えるわけであります。したがって、職業をもって奉仕とは考えることができないのであります。

勿論、弱者保護については、ロータリーも社会奉仕の範疇においてこれを重視し実践しているのあります。この素朴な考え方では、職業という視点から奉仕ということを考えることが出来ないのであります。

要するに、所得を得るために行動する時の心、即ち金儲けの心と、世のため人のために奉仕する時の心とは、全く次元を異にしているわけであります。

実は、ロータリークラブ以外のアメリカ系奉仕クラブは、殆ど全てこの考え方であります。ライオンズクラブ然り。シビタン、コスモポリタン、皆然りであります。

ところが、ロータリーは、職業を営む心も奉仕の心も共に同じ一つの心、つまり、金を儲けるために考えるエネルギーと世のため人のために考えるエネルギーとは、その向かっている方向は異なるが、その行動を起こす元になる心は、一つの心だと考える、即ち、一つの心をもって、職業を営み且つ奉仕すると説くのであります。換言すれば、世のため人のために奉仕する心をもって職業を営むべし、と説くのであります。したがって、この考え方では、必然的に、職業を営む時に世のため人のためという倫理性を要求することにならざるを得ないのであります。

さて、我々は、倫理の問題を考えると、人間の行動パターンを考えてみる必要があります。それは、『打算の世界』と『愛情の世界』に大別出来るのであります。

(1)『打算の世界』とは、人間が価値を求めて行動する分野であります。人間は、本来、価値のないものは相手に致しません。例えば、1万円の商品

と1万円の貨幣とが交換されるのは、その交換によって売主・買主双方にそれぞれ何らかの利益があると考える時に、この等価交換は成立するのであって、一方が交換によるメリットがないと判断した場合には、この等価交換は成立致しません。

このように、打算の世界とは、人間が等価交換の原則の下で常に何らかの価値を求めて、打算によって行動する分野のことあります。

(valuable な世界)

(2)『愛情の世界』とは、貨幣価値等では計ることの出来ないほど価値のある世界、そこには、打算や等価交換の原則などは、一切存在しない、そういうものを一切必要としない世界、例えば、夫婦の関係のように、私の物は貴方の物、貴方の物は私の物、という考え方の支配する世界。そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき愛情があります。この価値は、計り知れないものと言わなければなりません。(invaluable な世界)

ところで、打算の世界では、等価交換が終了するまでは、人と人とが関係づけられていますが、一旦、交換が終了すると、その人間関係は貸し借りなしに精算されてしまいます。例えば、1万円の商品と1万円の貨幣が交換されることによって取引は終了し、売主・買主の間は、一切貸し借りなしに精算されて、後には何も残りません。

ところが、愛情の世界では、例えば、ご主人が今月の手形の決済が出来なくて困っている時に、奥様が実家から貰った500万円を提供し、例えそれが返して貰えないことになったとしても、それを裁判にかけてまで請求することは絶対にありません。その限りにおいて、精算されないままに因縁が残っています。打算の世界から見れば、まさに奥様が損をしたことになるのであります。それを損とは考えない、即ち、打算的思考の圏外にある思考であります。そこには、一切の打算がありません。しかし、限りなき愛情があります。

ところで、私達の職業の中にも、只管この愛情の世界にのみ生きてきた職業があります。例えば、宗教家の世界も愛情の世界であります。僧侶は、ただ

只管に仏の道を説きます。それは、御布施を求めて仏の道を説くわけではありません。人々に対する限りなき愛情をもって、人々の悩みを救うために、ひたすら仏の道を説くのであります。その結果、人々が感謝の気持ちをもって御布施を差し出せば、感謝の気持ちをもってそれを受けとるのであって、それはあくまでも結果の問題であります。したがって、人々が貧しくて、御布施を差し出すことが出来なければ、出さなくともよいのであり、それを僧侶の方から請求すべき筋合のものではありません。したがってまた、この関係は精算されないままに、僧侶の生活は、その分だけ社会に対して貸し方になっているのであります。その故にこそ僧侶は、世の中から尊敬と信頼をもって報いられるのであります。

これは何も宗教家に限ったことではありません。中世ヨーロッパにおいて宗教から派生した法学、医学、哲学、教育学皆然りであります。

ロータリーは、これらの分野の職業を一括してprofession と称し、利潤追求を第一義とするbusiness と区別しているのあります。したがって、宗教家をはじめ大学教授、弁護士、医師等は、神様から与えられた客観原理をもって人々を救済することを第一義とする職業であると考えられているわけあります。

実は、職業奉仕というのは、この愛情の世界の考え方をもって、打算の世界をコントロールして行こうという考え方、即ち愛情をもって職業をコントロールして行こうという考え方あります。これが職業奉仕の根本原理であります。

愛情の世界は、人間関係が精算されないで、常に人と人とが或るものによって因縁づけられている世界、色々な出会いがいつまでも尊重されて行く世界、そういう関係の中から尊敬と信頼が生まれて来るのであります。実業家の場合には、更に信用が生まれるのであります。尊敬と信頼そして信用があるからこそ実業家は、長期的に安定した経営をすることができるのであり、個々の取引が常に貸し借りなしに精算されていく打算の世界からは、尊敬も信頼も信用も生まれないのであります。世の中の大成した実

力を越えて、150% 200% の商品を作れば、儲かるかも知れませんが、粗悪品の出る可能性も出て来ます。一つでも粗悪品が出ると、お客様に御迷惑をかけることになります。

更に、自分の信用を傷つけることにもなります。信用というものは、金銭をもってしては計り知れないほど価値のあるものであり、一旦失ったら取り返しの付かないものなのであります。したがって、精魂込めて自分の生産能力の80%の商品しか作らないのであります。これが職業の倫理であります。そして、自分の生産能力を越える注文に対しては同業者の方へ譲るのであります。これが同業共存共栄の倫理であります。

このように、古来、人間が徒らに金を求めて身を滅ぼした例は枚挙に暇がありません。しかし、人間が心を求めて身を滅ぼしたことは、未だその例を聞かないのであります。

ロータリーは、倫理の裏打ちのある企業活動こそが永続的に安定した利潤を獲得し、自由競争を必ず勝ち抜いて行くということを原理論的にも実践論的にも立証して行くものであります。

既に立証されている事実としては、1929年に始まるアメリカ経済社会を襲った空前絶後の大パニックに際して、ロータリアンは一人も倒産していないという事実であります。これは、ロータリアンが例会における発想交換機能を通じて、倫理的な企業活動のノウハウを開発し、それを自らの企業に実践してきた功德だと言われているのであります。この故に、ロータリーの職業奉仕は、不況期に強い哲学であるとも言われているのであります。

しかし、ロータリアンだけが倒産せずに生き残ればよいというわけではありません。ロータリアンは、職業奉仕の原理を実践することにより自由競争の勝者になることができます。そして、勝者になる過程において、自由競争に破れて行った敗者の代弁者となって、世のため人のために力を尽くさなければならぬということをロータリーは説いているのであります。

殊に、ロータリーは倫理運動の視点に立って、同業者関係や下請関係においては、常に倫理を提唱し、

共存共栄の道を模索すべきことを説くのであります。これは、職業奉仕の大きな柱であり、ロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面なのであります。

この故に、『ロータリーは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動』なのであります。このことは、ロータリーの綱領において、明確に表現されているところであります。

以上を要するに、同業関係を貫く指導理念は、同業共存共栄であります。ロータリーの職業奉仕は、如何にすれば同業共存共栄の実を上げることができるかの原理を説くものであります。

そこで、ロータリーは、この問題については、かなり理性的な分析をして、自由競争の長所と短所を引出すことに成功しているのであります。

まず、長所は、自由競争は技術開発に役立つのであります。競争だから新しい技術を開発します。したがって、販売技術・製造技術、その他諸々の技術開発には、大変役立つのであります。

次に、短所は、同業者が居ますから互いにある種の危機感を持ち、疑心暗鬼になります。この要素を取り除かなければ同業共存共栄の理想を達成することはできません。

そこで、疑心暗鬼を取り除くためには、例会で良質なIdeaを開発し、これを業界に持って行って同業者とIdeaの交換をする必要があります。そのためには、先ず【同業組合】を結成して、皆で共同してIdeaを開発しなければなりません。

勿論、同業組合が全国的になると各地のロータリアン達が参加します。そこで、ロータリアンは、手に手つないで同業組合育成にリーダーシップをとるようにしなければならぬのであります。これが職業を通じて世のため人のために奉仕することになるのであります。

このように、同業者がIdeaの交換、Ideaの共同開発を行った上で、自由競争のための武器であるIdeaは、お互いに平等対等に持って、自由競争は自由競争で一生懸命にやろうというのがロータリーの同業関係における基本的な図式（武器対等の原則）であ

ります。

自分だけが優れたIdeaを持って栄えていこうというのは、自分のことしか考えないエゴイズムの思考であり、到底世のため人のためのことを考えているとは言えないのであります。

同業者が、手に手つないでIdeaの共同開発をする、その元になる良いIdeaは、ロータリアンがロータリークラブの中から持ってくるという図式であります。

では、具体的には、一体どのような方法によるべきでありましょうか。

ロータリアンは、自由競争社会において、職業奉仕を実践することにより必ず勝者になります。その勝者になる過程において、或いは勝者になった後で、敗者の代弁者になって救済の手を差し延べなければなりません。その方法は、先ず、自分が成功して勝者になったノウハウを敗者に公開することであり、次に、職業人として為すべきこと為すべからざることをお互いに誓い合うこと、いわゆる職業倫理の提唱であります。

第一に『ノウハウの公開』であります。

先ず、同業者間の疑心暗鬼・危機感を払拭して、共存共栄の実を上げるためには『ノウハウの公開』が必要不可欠であります。

ロータリアンがクラブ例会に出席して得た諸々のIdeaを、自分の企業に適用することにより成功したならば、そのノウハウを同業組合にもって行って同業者に披露するのであります。

ノウハウを公開すれば、自由競争に負けてしまうと考える人がありますが、実は、返って共存共栄の実が上がるのであります。

即ち、ここでいわゆるノウハウとは、産業秘密的なものではありません。成功することが完全に立証されたノウハウのことであります。何故なら、もし、成功することが立証されていないものを公開して、それを適用した人が失敗すれば、他人に迷惑をかけ、世のため人のためにはならないからであります。

成功することが完全に立証されたノウハウを同業者のために、更に自由競争の敗者のために公開するのであります。事例を紹介しておきます。

ハーバート・テイラーが、1932年に倒産したアルミ食器会社の再建を依頼され、約10年後に一流の企業に育て上げたのを見たシカゴ商工会議所の人達が、テイラーに対し『君は素晴らしいことを成し遂げた。何か秘密があるだろう。手のうちを明かせよ』と言ったところ、テイラーは『実は、四つのテストというものを考案して皆で力を合わせて頑張ったんだ』と答えました。

そこで、商工会議所の人達は、『そのノウ・ハウは、君が成功したことによって完全に立証されている。それを皆に披露しよう』と行って商工会議所傘下の企業家達に公開されることになったのであります。

これを見て、シカゴロータリークラブの会員達が、『それをロータリーへ譲らないか』と言って、1954年、彼が国際ロータリーの会長に就任したのを契機に、その著作権を国際ロータリーへ委譲したのであります。

これは、ノウハウが商工会議所からロータリーへ逆輸入された例であります。本来はロータリークラブでノウハウを開発し、それを同業共存共栄のために同業組合で公開し、更に商工会議所で公開するというのがロータリーの奉仕の図式であります。事例を紹介しておきます。

千葉医大の中山恒明教授は、従来、死亡率90%以上と言われた食道癌について、2年間訓練された外科医であれば誰でも簡単に手術できる手術法を開発し、そのノウハウを誰にでも教えたのであります。その理由は、自分一人では一日に100人の患者を手術することはできないが、このノウハウを100人の外科医に教えておけば、一日に100人の患者を救うことができる。医学は、公のものであって、私にすべきものではないというのであります。

これは、professionの倫理、即ち医学が神学の分かれである事を大悟徹底した人の言葉であります。

序でながら、中山先生は『医師になってほしい人は、頭の良い人であるに越したことはないが、剃刀のように切れる鋭い頭脳の持ち主よりも、動物や草花を愛する人間性の豊かな人に医師になって欲しい』とも言っておられるのであります。これはまさに、

倫理的な人間に医師になってほしいということであり、人を救うことを職業の第一義とするprofessionの倫理をもって職業をコントロールするために、欠くことのできない要素であろうかと思うのであります。

何はともあれ、同業共存共栄のためには、ノウ・ハウを公開すべきであります。同業が栄えるということは、必ず自分も栄えることになってくるのであります。したがって、自分が栄えるために同業者が潰れてほしいという論理は、ロータリーでは通用しないのであります。

更に、事例を紹介しておきます。昔の西ドイツが未だシュミット首相の時代の古い話であります。首相が破産寸前のイタリアを救うために、返済の見込みのない20億ドルの借款を与えようと議会で提案した時に、議会の反対に対してシュミット首相は、『イタリアの崩壊はヨーロッパ共同体の崩壊を意味する。ヨーロッパ共同体が崩壊すればドイツも危ない。したがって、ドイツが生き延びるためには、イタリアを救わねばならない』という論理をもって議会を説得したそうであります。

やはり、他人を生かしてこそ自分の生きる道もある。ロータリーの説く共存共栄というのは、かなり厳しいところがあるのであって、このことも心に止めておかなければならないと思います。相手の身になって考えるということが非常に厳しいものであること、そして、その事がこれからの時代を生き抜く道でもあると思うのであります。

要するに、自由競争には、甘えの論理は全くあり

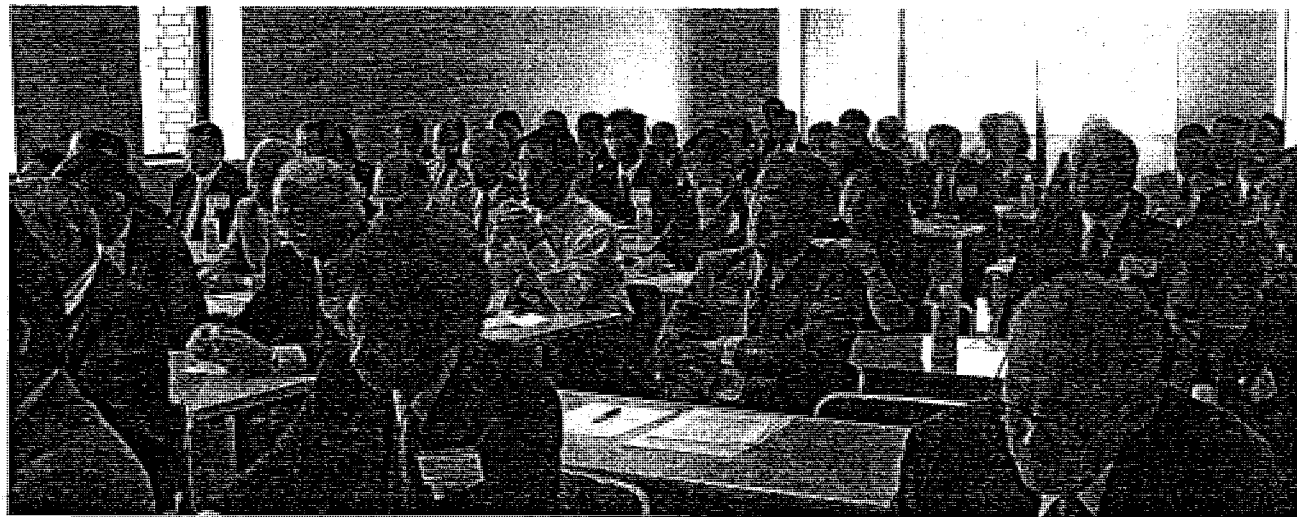
ません。したがって、自由競争を前提とする職業奉仕にも甘えの論理は毛頭ありません。

時々、誤解をして、奉仕というある種のロマンチズムに酔って競争意欲をなくしてしまう人があります。即ち、自分はロータリークラブを退会して、自由競争で思い切り金を儲けた後、再びロータリーに入会して奉仕するという人がいますが、これは職業奉仕を誤解しているものであります。

職業奉仕は、同業者との関係では闘争の論理であります。甘さは一切ありません。したがって、闘争に勝とうと思えば、職業奉仕に徹することです。したがって、職業奉仕の判らないロータリアンは自由競争に敗れていくと思います。

最近、ロータリーを辞めていく人が増えていますが、これは職業奉仕が判らないからであります。本当に職業奉仕が身に付いたならば、ロータリーを辞めることはありません。職業奉仕の魅力の虜になって、隆々と栄えて行くだろうと思います。

自由競争社会を生き抜いていく時に、勝利者になる過程において、敗者を救済しながら栄えていく、共存共栄の道を模索することによって、初めて、自分は、一私企業の社長にとどまらず、世のため人のための支柱にもなっているという自覚を持つことができるのであり、自分のためのものである職業が同時に人のための奉仕にもなるのであります。ここに人生の意義があるのであって、自分のことだけを考えている人生には、何らの意味もありません。自分も儲けるが、その儲ける考え方は、同時に、周りの人達も儲ける策を作っていく、こういう形になって



初めて、二度とない人生を意義あらしめることができるのであります。これは、甘えの論理ではないので注意を要する所であります。

第二に『倫理の提唱』があります。同業者の共存共栄のためには、ノウ・ハウの公開の他に『倫理の提唱』が必要であります。業界を浄化して、共存共栄の実を上げるためには、同業者が互いに、為すべきこと為すべからざることを誓い合い、これを地域社会の職業人に対して提唱する必要があるのであります。これはロータリーが倫理運動であることの面目躍如たる場面であり、職業を通じて社会に奉仕する典型的な事例であります。

即ち、ロータリークラブの例会は、良質な職業人の発想の交換・自己研鑽の場であります。ロータリアンは発想の交換・自己研鑽によって、よりよき自分というものを自覚していくわけですが、それぞれは企業経験を中心にしていきますから、企業経営観の改善という形につながって行きます。そこで、その経営観の総和をとらえてみると、地域社会に存在する全ての職業に適用せられるべき理想的な職業観、職業の倫理を宣言することができるのであります。

最初にこの宣言をしたのが、1915年のサンフランシスコ国際大会の決議による『全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓』（別名・ロータリー道徳律・11ヶ条）であります。

その後、昭和3年(1928)大連ロータリークラブの古沢文作氏がこれを発見し、5ヶ条の日本語に書き改めたのが、昭和3年の『大連クラブのロータリー宣言』であり、これが戦前の日本のロータリアンの職業奉仕のバックボーンとなっていたことは、紛れもない事実なのであります。

次に『商会議所』の問題があります。

同業関係においてノウ・ハウを公開し、職業倫理を提唱していくために、同業組合結成運動の延長線上に商会議所育成運動があります。これが同業関係においてロータリアンの進むべき道であります。

1930年頃から1945年頃にかけて、ロータリーがアメリカ経済社会から非常な尊敬と信頼をもって迎えられたことがあります。それには、彼等が、世の

ため人のためにこれだけのことをしたという確固たる実践の軌跡がなければなりません。

では、その確固たる実践の軌跡とは一体何か、と言うと、実は、1929年から始まったアメリカ経済社会の空前絶後の大恐慌に際し、アメリカのロータリアンが職業奉仕の実践の一つとして、自由競争に敗れていった敗者を救済するためにノウ・ハウを公開し、倫理を提唱し、そして、その手段として同業組合を作り、商会議所を育てて行った、そのことが、アメリカ社会から大変な尊敬と信頼をもって迎えられたのであります。

このように、ロータリーがアメリカ経済社会の中で果たした最大の功績の一つが同業組合の結成運動と商会議所の育成運動であったのであります。

1910年から1942年まで32年間国際ロータリーの事務総長を勤めたチェスレー・ペリーは、『ロータリーが出来た時のことを考えてみよう。アメリカ社会に同業組合は一つもなかった。これはロータリーが作って行った。商会議所はあるにはあった。しかし、南北戦争後の工業化の波による人口の都市集中により、都市機能が麻痺し、商会議所はその行方を見失っていた。この同業組合のないところに同業組合を作り、やる気をなくしていた商会議所を、倫理を提唱する団体として蘇らせていったのはロータリーがアメリカ社会に残した最大の功德だ。ロータリーの功績歴然たるものがある』と言い切っているのであります。

このように、同業組合と商会議所とは、非常に大切な機能を持っているのでありまして、ロータリー運動がアメリカ社会に残した最大の功績なのであります。したがって、ロータリーの中で職業倫理の原型パターンを作り、それを商会議所に移植して周知徹底させる、これがロータリアンの進むべき道であります。したがって、日本のロータリアンは、同業組合の体質改善を図り、商会議所をロータリーの経営理論に合わせて運営するという具合に、商会議所の中でリーダーシップをとるようにしなければならぬと思うのであります。

以上、同業関係について職業奉仕の原理の世界を眺めてみた次第であります。以上